

関 智宏 (阪南大学経営情報学部教授)

ものづくり中小企業と ネットワーキング

－アドック神戸をケースとして－

商工金融 Vol.64 No.10
pp.5～19 2014.10.

本論文は、「ものづくり中小企業がいかにネットワークにかかわっていくか（ネットワーキング）」という主体的・能動的・動態的な視点から、中小企業のネットワーキングの実際とその意味について考察することを目的とし、兵庫県中小企業家同友会（「同友会」）を母体とするものづくり中小企業のネットワークとしてアドック神戸をとりあげ、検討」している。

「1.はじめに」では、「企業など諸組織間のネットワーク形成の目的である」、「企業など諸組織間のネットワークの成果である」、及び、「企業など諸組織間のネットワークの進化である」とした、3つの注目点から論じていくことが述べられている。

「2.研究方法とデータ」では、ケース・スタディを用い、意味解釈法によって、「アドック神戸会員企業の経営者およびアドック神戸事務局に対して実施してきた幾度にわたるインタビュー調査によって収集」したデータ等により質を確保しているとしている。

「3.ケース－アドック神戸の発展 1996～2014年－」では、設立当初の活動を「アドック神戸1.0」として、2008年の「アドック神戸ドゥー」の活動から2014年までの活動を「アドック神戸2.0」として、それぞれの活動を紹介している。

「4.ディスカッションと発見事実」では、「共通目的」、「共通目的とネットワークを構成する

当事者の目的との関係」、「ネットワーキングの重要性」、及び、「所属する企業の活動目的とネットワークの共通目的とが合致しない場合」の4項目の指摘がなされている。

「5.小結」では、重要な発見事実として、「ネットワークを構成する当事者がいかなる成果を享受するかについては、その当事者の主体的な行動に基づくネットワーキングによるものであって、ネットワークそれ自体がもたらすものではない」こと、並びに、「ものづくり中小企業のネットワーキングは、それ自体が企業の存立維持のための成果享受のプロセスとして重要であることには間違いないだろうが、あくまでネットワークを構成する当事者（企業）の目的によるのであって、そこが合致しなければ、ネットワークから退出していかざるを得ない（「ネットワーキングのパラドクス」）」の2点を挙げている。

本論文は、2008年からのインタビュー記録等により、丹念なケース研究が行われており、「アドック神戸1.0」から「アドック神戸ドゥー」の結成、そして、「アドック神戸2.0」に至る道筋、あるいは、各会長のビジョン達成のためのリーダーシップの発現などの記述は、興味深い。特に、「アドック神戸2.0」については、「国際化」、「M&A／強い下請」、及び、「事業継承」の3つの取り組みについて、詳細、かつ、丁寧な論調で示唆に富んでいる。

ただ、母体の同友会において、製造部会の活動から「アドック神戸」の形成が、国際交流部会の国際交流から「ワット神戸」の形成が行われたことが述べられているものの、「アドック神戸」の活動が、「事業継承」のところで述べられているように、筆者のいう「ネットワーキング」の失敗から退会に至るという負の側面だけでな

く、母体の同友会にどのような新たな派生効果を生んだのか、正の側面からの事例、あるいは、見解も示して欲しかった。また、今後も、継続して、「ものづくり中小企業とネットワーキング」の研究を進めていく際には、本論文での発見が、他の中小企業間のネットワークでも見られる普遍的なものなのか、それとも「アドック神戸」に特有なものなのか、明らかにしていただきたいと期待している。

（東北工業大学ライフデザイン学部教授 渡部順一）